

平成 21年 3月 31日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17510022

研究課題名（和文） 風土的環境倫理の可能性と日本の自然観の意義

研究課題名（英文） The possibility of environmental ethics in Landschaft and the meaning of Japanese View on nature

研究代表者

亀山 純生（KAMEYAMA Sumio）

東京農工大学・大学院共生科学技術研究院・教授

研究者番号：20161242

研究成果の概要：

風土的環境倫理およびその骨格を初めて提示し、地域計画や自然保護運動の研究者等との交流を通して、それが地域づくりや自然保護運動にとって有効であることを基本的に明らかにした。また、日本の自然観の現代的モデル化を試み、それが現代日本人においてリアリティを持つことを、初めて実証的に明らかにした。そのことを通して日本の環境倫理、特に風土的環境倫理の意識的基盤を確認するとともに、ジャーナリズムや論壇等で従来日本の自然観とされてきたものが生活次元での自然観・民衆の歴史的な自然観と異なることを明らかにし、もう一つの伝統的自然観の系譜の可能性を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2005年度 | 1,200,000 | 0       | 1,200,000 |
| 2006年度 | 1,000,000 | 0       | 1,000,000 |
| 2007年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 2008年度 | 600,000   | 180,000 | 780,000   |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 3,300,000 | 330,000 | 3,630,000 |

研究分野：複合領域

科研費の分科・細目：環境学・環境影響評価・環境政策

キーワード：倫理学、環境倫理、風土、思想史、日本の自然観

## 1. 研究開始当初の背景

environmental ethics 導入による日本の環境倫理は、人間中心主義と自然中心主義の2項対立図式に陥り、ある種閉塞状況を呈し、地域や環境保護問題の現場のニーズと乖離状況にあることが指摘されていた。他方、伝統に依拠する日本の自然観の注目も、単なる情緒主義として、現場乖離も指摘されていた。環境倫理が地域や環境保護の現場での合意に意義を持つためにはこの難点の克服と、日本の現実および現代日本人の感覚に適合的な環境倫理が求められていた。この点に関連

して、1990年代半ばから急速に日本社会に定着した“人間と自然の共生”というキーワードが、果たして自然保護の理念ないし環境倫理の原理として有効か否かも、課題として浮上していた。他方、農業や地域づくり運動の中で、風土に注目する論調も登場していたが、そのことと環境倫理ないし自然の開発・保護の原理との関連は不鮮明であった。また環境倫理の現場の問題としては、環境汚染や温暖化問題など人間の生物的生存条件上の“限界”は、人間の自然への関与やライフスタイルに関わる環境倫理の原理としては明確で

あった。だが、この“限界”内での地域開発・自然破壊の限度、どこにでもありふれた自然の保護の倫理的正当性、さらには景観問題のように、歴史や文化的条件に左右される場面における自然保護の原理は、不明確であった。このような状況は、現代人の自然感覚に適合的な日本の環境倫理、地域の問題に回答する環境倫理を、価値観の多様な現代人における合意の原理として確立することを要請していた。そこから共生理念と風土と環境倫理の結合可能性（風土的環境倫理の可能性）及び、日本の自然観の現代的リアリティの検証が不可避的に要請されており、本研究が企画された。なおこれに関する類似の研究はなく、本研究が最初の試みである。

## 2. 研究の目的

- (1) 人間と自然の共生を理念とする環境倫理と風土の内的関連、風土的環境倫理の特徴を解明し、それが日本の環境倫理として国民に共有される可能性、環境問題や地域づくりの現場で合意を導く可能性を明らかにする。
- (2) 生活レベルでの伝統的自然観ないし日本人の自然観の特徴を「日本の自然観の型（モデル）」として析出し、それが民衆意識に即した伝統的自然観として妥当か否かを明らかにしつつ、その現代的意義を明らかにする。
- (3) 自然保護・地域づくりの現場の視点から、風土の意義、風土的自然観を検討し、日本の自然観の意義を明らかにする。

## 3. 研究の方法

- (1) 環境倫理学、共生理念、風土概念に関わる理論的研究を行い、風土と環境倫理の関連を明らかにする。それをふまえ、風土的環境倫理の基本的内容を構築し、風土的環境倫理を理論的に基礎づける。
- (2) 既存の日本の自然観に関する議論を分析し、「方法としての日本の自然観モデル」を構築する。一方でこれを、本研究代表者が構築してきた歴史的民衆思想の分析方法である物語的再構成の方法により、過去の民衆的自然観を示す「物語」の分析を通して比較研究する。それをとおして、「日本の自然観」モデルが歴史的世界における伝統的な日本の自然観として妥当か否かを検証する。他方で「日本のモデル」にもとづくアンケート調査を行い、「日本の自然観」の現代的妥当性を検証することを通して、現代人における日本の自然観のリアリティを検証する。
- (3) 地域研究、自然保護研究の現場との交流を通して、風土的環境倫理の実践的可能性および日本の環境倫理における日本の自然観の意義を検討する。

## 4. 研究成果

- (1) 共生理念に基づく風土的環境倫理の骨格

の提示

1990年代から日本社会に定着した「人間と自然の共生」の内容の混乱を、生物学的共生概念や日本の思想的伝統における共生論との関係を中心に整理した。そのことを通して、倫理的規範としての共生概念は、生物的共生に還元しえない固有の社会的規範概念として成立したこと、その対自然関係への拡張として「人間と自然の共生」理念が成立したことを明らかにし、共生の内容と意義を独自に明らかにした（別記論文4, 6, 図書3等）。

現代における風土の語の用法の混乱、学問分野による風土概念の相違・分立状況を、和辻哲郎、A.ベルク等の風土概念の批判的検討を通して統一し、風土が失われつつある現代日本に有効な風土概念として再提起した。

そこで風土を *Landschaft* と対応させ、「一定の地理的空間における共同社会と生活的自然の一体的関わりの全体」と定義することが妥当であることを明らかにした。そこから、地域の自然、文化、社会、人間性等、地域の特徴を示すあらゆる事象は、かかる風土の現れ（風土の現象）であり、これら風土現象の記述の全体を通して地域の風土の全体が示されることを明らかにした。これらを軸に、風土は、生活的自然、人間の共同関係、人間と自然の直接的関わりの3つを契機とする風土の構造を明らかにし、そこから現代における風土の保護・再生の意義を明らかにした（別記論文4, 5, 図書1, 3等）。

特に風土の3契機を軸に、地域の自然保護ないし地域づくりの原理として三層の入れ子構造をもつ風土的環境倫理の規範モデルを策定した。すなわち、下記の風土の公理を基本とし、その内容の - 1の展開態として9カ条からなる風土的自然の原理（省略）をもち、その内に含まれる風土性に基づき、3カ条からなる風土性の原則（省略）として展開した（別記図書3）。

なお風土の公理は以下の如く提起した。「風土の公理：地域の自然との関係において風土が失われてはならない。

-1. 地域の自然において生活的自然としての性格と質が失われてはならない。

-2. 地域社会・人々の自然との関わりにおいて共同性・共同関係が失われてはならない。

-3. 地域の自然と人々との関係において一体性と身体的関わりが失われてはならない。」

以上のように、風土と環境倫理の関係の解明は、倫理学を含め日本の環境倫理関連分野においては希少であり、特に風土的環境倫理の可能性は、初めての試みである。

(2) ジャーナリズムや論壇等における日本の自然観の議論を検討し、先行研究の成果を踏まえて、新たに、下記18の態度類型からなる日本の自然観のモデル化を行った（別記図

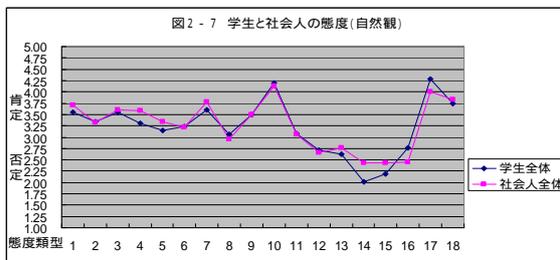
書 1 の第 1 部：日本の自然観のモデル化とそのリアリティ)

1. 畏敬一恐れの状態
2. 畏敬 甘えの状態
3. アニミズム
4. 花鳥風月 審美的態度
5. 自ずから然る (自然主義的態度)
6. 自然即人生：自然現象に人生を重ねる
7. 自然との一体感
8. 友としての自然：自然への擬人的態度
9. 非日常空間としての自然
10. 生態学的態度：自然の有機体と見る態度
11. 否定的態度：自然への敵対的態度
12. 支配的態度：自然を統御対象と見る態度
13. 分析的態度：自然全体より個物から自然
14. 実用的態度：自然を主に利用対象とみる
15. 開発志向：経済的開発優先の態度
16. 無関心
17. 倫理的態度；人間同様に動植物と関係
18. 人工的自然も自然と見る態度

(3)上記日本の自然観のモデルを、49 項目の質問事項に整理し、2005～2006 年に全国各大学の学生 (1188 名) 及び中山間地域を中心として社会人 (215 名) にアンケートを行い、日本の自然観モデルの現代的リアリティを検証した。

学生を主な対象にしたのは、高度消費社会の世代として伝統的自然観の影響が少ないこと、未来の日本社会における日本の自然観のリアリティを予兆すると想定されたからである。また、一般的に学生は日常生活において自然との関わりや、風土との関わりが少ないと想定され、これと中山間地域で日常的に自然と関わり、風土と関係が深いと想定される社会人にもアンケートを行い、それとの比較で、日本の自然観と風土との関連を明らかにしようと試みたものである。

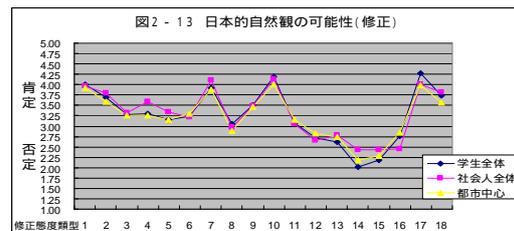
その結果は、別記図書 1 (第 1 部) に詳しく報告してあるが、その一端は同書から抜粋した下記図 (2 - 7) に象徴的に示される。



各態度タイプの得点は、5 に近いほど各態度タイプに肯定的であり、1 に近いほど否定的であることを示す。回答動向を検討した結果、3.25～3.75 は明確な肯定的傾向、3.75 以上は強い肯定的傾向、2.75～2.25 は明確な否定的傾向、2.25 以下は強い否定的傾向を示す。本研究における日本の自然観のモデルは、態

度類型 1～8,10, 17,18 を日本の特徴として肯定を示すと想定し、態度類型 9, 11～15 を欧米の特徴として否定的傾向を示すと想定していた。アンケートの結果は、態度類型 8 を除いてほぼ想定通り、現代学生、及び中山間地域の社会人に日本の自然観が基本的にリアリティをもつことを、大まかな傾向ではあるが、初めて実証的に示した。そのことは、アンケート結果を踏まえて、質問内容と態度類型の関係を再編成し、下記の点で態度類型を修正することで、いっそう明瞭となる傾向が見られた (下図 2 - 13)。

- 修正態度類型 1：自然の人間包括イメージ
- 修正態度類型 2：アニミズムの現代的形態 (生命力中心の自然、有機体としての自然)
- 修正態度類型 3：アニミズムの前近代的形態 (自然の宗教表現等)



これらの傾向は、学生と社会人、回答者の成育地域別、男女等によって、ニュアンスの相違はあるが、ほぼ共通であった。学生に比べて社会人の方が 14. 実用的態度、15. 開発志向への否定の度合いが弱く、自然が多い地方出身者と女性の方が、大都市出身者・男性に比べて、日本の特徴への肯定的傾向、西欧の特徴への否定的傾向が強い傾向が見られた。しかし基本傾向は同じであり、そのことは「人間と自然の共生」の基礎となる自然観を示し、将来的にも日本の自然観が日本の環境倫理のイデオロギー的・観念的母体として現実的意義をもつことを照射した。

(4)上記「日本の自然観のモデル」を、今昔物語、沙石集、お伽草紙等から「物語的再構成」の方法により析出された中世民衆世界の自然観と比較検討を行った。その結果、現代のジャーナリズムや論壇等における日本の自然観は、文学等のハイカルチャーからの析出であることを明らかにした。その成果の一端は、研究協力者品田みづほ「今昔物語の分析による日本の自然観」を含む別記図書 1 第 1 部で公表されている。さらに近世農民の自然観を分析し、そこに「人間と自然の共生」のパラダイムが内包されていることを明らかにした。そして、それを古代中世の民衆的自然観と線的に展望することで、ハイカルチャー由来とは異なるもう一つの民衆世界の伝統的自然観の可能性を明らかにした (別記論文 1)。

そのことはさらに日本思想史への抜本的

問題提を内包し、その点から、三木清の親鸞論を通して頂点的思想と民衆思想との関係の再検討(図書2)、日本思想史のパラダイムの再構築の方向を提起した(論文2)。

(5)地域づくりや自然保護運動の現場の視点や論議との交流を通して、地域の自然保護と担い手形成や地域の共同の関係の不可欠性、地域の個性と地域づくりの不可分性、地域の個性と地域の自然(との関わり)の不可分性、地域の個性と住民のアイデンティティの関係などが現場の問題であることが明らかにされた。そのことは風土の概念がそれらの問題の媒介項となりうることを理論的実践的に示しており、さらには風土的環境倫理が、地域再生や自然保護運動の現場で、合意の基盤となりうる可能性をもつことを明らかにした。これらの成果の一端は、別記図書1(第2部:風土的環境倫理の可能性)学会発表等1~3等で公表されているが、今後も「風土保全の現代的意義」等として公表予定である。

(6)日本の自然観の現代的リアリティを背景にした風土の現代的再構築の意義と可能性の検討は、本研究計画当初以上の問題の広がりをもち、風土概念が疎外克服、共同やコミュニティの現代的形成、教育理念の根本的転換、近代的人間観の再検討、動物園における日本の環境エンリッチメントなどに、有効な意義をもつ戦略的位置にある可能性を明らかにした。その成果の一端は、研究協力者の以下の論稿を含め、別記図書1第3部に示されている。野田(松本)恵「農山漁村における自然体験活動の意義 風土のもつ教育機能の観点から」、増田啓祐「風土にみる持続可能な共同性」、山崎彩夏「現代の人と動物の関係と日本人の動物観」、三沢朋有「日本風土における生成の側面」、アラ坦沙「『風景』としての遊牧風土から真の遊牧風土へ」。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌等論文〕(計 6 件)

1. 亀山純生 2008 「二宮尊徳の農本思想の共生的性格と思想史的意義 近世民衆世界の日本の自然観の体系化の試み」、共生社会システム学会『共生社会システム学研究』農林統計協会、Vol.2.No.1、pp. 124 - 148, 査読有
2. 亀山純生 2008 「日本思想史における“総合的思想史”と“日本哲学史”の必要性」、『立命館文学』第603号、pp. 59 - 71, 依頼
3. 亀山純生 2007 「環境的正義と風土的環境倫理」環境思想・教育研究会『環境思想・教育研究』第1号、pp. 20 - 25, 依頼

4. 亀山純生 2007 「“人間と自然の共生”理念の意味・意義と風土」尾関周二・矢口芳生編『共生社会システム学序説』青木書店、pp. 46 - 64、依頼

5. 亀山純生 2006 「風土的環境倫理の意義と射程」名古屋哲学研究会『哲学と現代』22号、pp.15 - 34、依頼

6. 亀山純生 2005 「“人間と自然の共生”理念の性格と意義」、日本科学者会議『日本の科学者』Vol.40-11、pp.22 - 27、査読有

〔学会等発表〕(計 3 件)

1. 亀山純生、環境倫理と風土、東京農工大学生存拠点シンポジウム「地域“再生”・自然保護と風土」、東京農工大学、2008,6,7

2. 亀山純生、環境倫理と風土、岐阜大学シンポジウム「岐阜：森とともに生きる風土」、岐阜大学、2006,11,4

3. 亀山純生 2006、風土と現代の倫理、名古屋哲学研究会、名古屋市立大学、2006,4,23

〔図書〕(計 3 件)

1. 亀山純生(編著)2009『風土的環境倫理の可能性と日本の自然館の意義』報告書冊子、総頁203頁

2. 清真人・津田雅夫・亀山純生・室井三千博・平子友長 2008『遺産としての三木清』同時代社、pp.210 - 256

3. 亀山純生 2005『環境倫理と風土 日本の自然観の現代化の視座』大月書店、総頁240頁

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

亀山純生(KAMEYAMA Sumio)

東京農工大学・大学院共生科学技術研究院・教授

研究者番号：20161242

##### (2)研究分担者

なし

##### (3)連携研究者

なし

##### (4)研究協力者

野田(松本)恵(東京農工大学大学院連合農学研究科)

増田敬祐(東京農工大学大学院連合農学研究科)

山崎彩夏(東京農工大学大学院連合農学研究科)

品田みづほ(東京農工大学大学院農学府)

三沢朋有(東京農工大学大学院農学府)

アラ坦沙(東京農工大学大学院連合農学研究科)